末梢血液像から診断および推定可能な疾患を読み解こう！

◎海野　晃久[1)]
佐賀大学医学部附属病院[1)]

【患者】　60 歳代、男性
【主訴】　皮下出血
【入院時検査所見】
《血液》WBC 3.3×103/L、RBC 2.36×1012/L、Hb 7.9g/dL、Hct 21.6%、PLT 27×109/L、Ret 1.1%《凝固》PT60.0%、APTT 22.5秒、Fib 100.4mg/dL《生化学》TP 6.5g/dL、ALB 3.8g/dL、LD 176 U/L、AST 21 U/L、ALT 19U/L、ALP 64 U/L、T-Bil 0.7mg/dL、D-Bil 0.1mg/dL、BUN 9.0mg/dL、CRE 0.78mg/dL、UA 5.0mg/dL、CRP0.14mg/dL、Fe 219μg/dL、FER 335ng/mL、IL-2R 511U/mL

血液疾患を検査診断するにあたって、骨髄検査などの詳細な検査が必要です。しかし、末梢血液像から診断、推定できる疾患は存在します。まずは、各検査値から疾患を推測できるか考えてみましょう。血算は白血球、ヘモグロビン、血小板に注目。また、凝固・線溶系、生化学の検査値に特徴的な所見はないかどうかを確認します。

次に、末梢血液像からアプローチする際、どのような細胞が出ているか、まずは全体を見渡しましょう。白血球の形態はどうか、異常がある場合、その異常細胞は白血病細胞か、リンパ腫細胞か、反応性の細胞なのかどうか。そして、細胞の大きさ、細胞質の顆粒の有無、核形、核のクロマチンという様に確認します。さらに、赤血球系、血小板系にも着目し、どのような形態なのか確認します。

造血器腫瘍の場合、特定するためには骨髄検査や特殊染色、フローサイトメトリー、遺伝子・染色体検査が必要ですが、末梢血の情報から疾患を推測し、どのような項目が追加検査として必要なのか、不要なのかを考え、臨床に助言できるようになりましょう。